
銀の煌蝶

kuku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の煌蝶

【Nコード】

N3913C

【作者名】

kuku

【あらすじ】

凍てついた雪国で、少年は戦いに巻きこまれていく

ブローグ

「処分されたわ」

俺の腕に針をさしこみながらクレメンザは、俺の「先生は？」という質問に答えた。

処分？今日子先生を？でもそれって、ゴミなんかを捨てる時に使う言葉じゃあなかったっけ。

処分、ゴミ、今日子先生、繋がらない言葉達に混乱していると、
「死んだってことよ」

と、クレメンザが舌打ちをしながら助け舟を出してくれた。

「『死ぬ』。わかる？」

「わかる」

知ってる。助け舟、舌打ち、死ぬ。全部先生が教えてくれた。

「もう先生は会いにこれないってことだろ？」

クレメンザは一瞬変な顔を見ると、タバコ臭い溜め息をついて、針を引き抜いた。

そして手早く消毒し、採取した俺の血を持って出ていった。

俺は何もすることが無いので、ベッドに座りこみ、腕の注射の痕を眺めることにした。

痕がほとんどわからないのはメガネの男の人の、青っぽくなっているのはクレメンザのだ。

一話

クレメンザは今日十二本目の煙草を口に咥えた。

火をつけ、深く息を吸う。

やはり研究所で作られたものは良い。

…少なくとも、ルー・トライブの獣人どもが吸っているのよりは、よっぽど。

中毒性のある香りが肺を満たすのを感じるのと同時に、微かな優越感に似たものが胸を満たした。

—これを十分に堪能してからでも、今日の観察記録、それから検査結果の報告書にとりかかるのは遅くない。

深い紫色の目を細め、クレメンザは暫しのあいだ、心地よい舌の痺れを味わった。

メノウの灰皿に吸殻を押し付けていると、ドアの開閉するシャープな音が聞こえた。

…隣室から。

続く、誰かのくぐもった欠伸。何から何まで筒抜けだ。

仮眠をとる事を目的とした部屋の壁は、研究室のそれと違って薄くできていた。

仮に羞恥心の欠如した人間がいたとして、それでもここで性行為に及ぶことはできないだろう。

最も、ここに女性はいない。

唯一の女性、実験体の教育係の今日子は外部から通っていたし、クレメンザは少なくとも、ここで彼女以外の女性を見たことは無かった。

そしてその女も、先日処分された。

—ニンゲンを創る事を目指した研究所で、本来踏まれる筈のプロセ

スは行われることが決してない。

その皮肉さに、クレメンザは思わず喉を鳴らして嘲う。

あの女、今日子。

書類でのやり取りが殆どで、直接会ったことは数える程しか無かった。

東の大陸から来たという彼女はひどく小柄で、ふとした瞬間にはまるで少女のようにも見えた。

たまたま一緒に研究所のゲートこゝをくぐった時に

セキュリティカードに刻まれた彼女の年齢を横目で見て、

愕然とさせられた経験もある。

それでも、彼女の思慮深さがうかがえる眼差しや研究者としての考えを述べる際の言葉には、

年齢相応の印象、あるいはそれ以上のものさえ感じられた。

そんな時クレメンザは密かに（そして勝手に）感心したものだ。

だからだろうか？

あの実験体の少年と接するのが、前にもまして苦痛になってきたのは。

そうなのかもしれない。

優秀な研究員であった彼女が、いつからか愚かなスパイ行為を行っていた、

その嘆かわしい変貌の原因は、あの子供ガキなのだから。

今日子はあの実験体に、アル―イルだったか？―などという名前までつけて

可愛がっていたという話だ。

そして彼女は、自らとあの実験体を保護することと引換えに、

急ごしらえの反乱軍レジスタンスなどに情報を売っていたなどというのだから、まったく笑えることだ。

ゴミがいくら集まってもゴミ。

ゼロをいくら掻き集めても、ゼロでしかないというのに、彼女にはそれがわからなかったのだろう。

十三本目の煙草を吸おうか迷って、結局火をつけた。

二話

細く歪んだ軀、
切る。

青く濁った眼、
叩き潰す。

同じ顔をこれで何人殺った？

息をつきながら思う。

何人目だ。

何人目？

違う、こいつ等は人間じゃない。

姿形はヒトを模しているが、これは。

ぽっかりと虚ろに空いた口が、意味を為さない言葉を発する前に、
俺はレイピアを挟りこむ様にそれに突き刺した。

金属が鈍く擦れ合うような音をさせて、
それは呆気無く崩れ落ちた。

すっかり顔を上げた俺の目に映った、顔が。

何も見ていない、何の感情も無い顔が。

これは、人間じゃない。

生きてすらいない。

「う、あ」

慌ててその腹に突き立ったままの剣を引く。
血が。

血が滑る。

いやらしい音をたてて剣が抜けた時には、
息があがっていた。

「アシュレー」

掛けられた声に振り向く。

いつのまにか俺のすぐ後ろに立っていた男。

肩までの赤毛に、長身。

細い柳眉は情け無く八の字にしている。

ヒョードル。

俺の兄だ。

ただし、全く似ていない。

「どうした、怪我でもしたのか？」

そう言つて覗き込んでくるのを、少し乱暴に押しのけた。

人を模したモノ達は、残らず床一面に倒れ伏している。

どうやら俺が動揺している間に、すべて兄がかたずけたらしい。

兄はまず珍しいものを見るように俺を見つめて、

次に一歩引いて俺を眺めてから、いつものようにニカッと笑つて、言つた。

「返り血でベタベタだな。」

次行くぞ。と続けて、自分はスタスタとドアに向かって歩き出す。

慌てて大股で並ぶ俺を横目で確認すると、速度を緩めず歩き続ける。

「服を汚さないように、もっと上手く立ちまわった方が良い。

うん、ここの奴らは練習に調度いいかもな。」

長い廊下の途中でかけられたあまりな言葉に、一瞬思考が停止する。ふざけにしても酷すぎる。

暫時の後力ツとなつて睨み付けると、

思いのほか真剣な兄の顔がそこにあった。

「アシュレー、わかつてるなおい。こいつらは人間じゃない。

それにお前、人間だつて斬つたことあるだろう。

今更なにを怯えている？」

「誰が怯えてるんだよ。俺はビビツてなんかない」

何時間かぶりに出した声は、嫌に掠れていた。

舌で唇を湿らして続ける。

「ビビッてねえ、けど、こいつら反撃しねえ、抵抗もしねえ。悲鳴だつてあげやしねえ。」

「気色悪いんだよ。」

それが怯えているんだ。と言われるような気がしたが、兄は妙に神妙な顔で一つ頷いた。

「うん、俺も気味が悪い。」

だけど、それがこいつらが人じゃないっていう

証拠みたいなもんだろ。

恐怖も痛みも、何も感じないのかもな。

「ひよつとすると、生き物ですらないのかもしれない。」

最後は呟くようにして、ふと黙り込んだ。

生き物じゃない

そう兄も感じていたことを知って、俺は正直安堵した。

なんだ、こいつだつてビビッんじゃねえか。

そう思った瞬間に、やっといつもの平衡感覚を取り戻した気がした。

そういえば、一緒に潜入したガキと女がいなくなっていた。

ヒョードルに聞くと苦笑しながら「お前こそガキだろうとでも思っているんだろう、どうせ」返事が返ってくる。

「プラナとトラシーボなら、俺達がアレを処分してる間に先に行つた。」

別働隊つてやつだな。奥の部屋を見てくるらしい。」

マジかよ、と思った。人ががんばってる間に先に行くだろうか普通？

「ったく、だからエリュシオン連中は嫌いつつーんだよ」

「そついうなアシュレー。俺達と彼等は

今は同盟を組んでいるんだからな。」

仲良くしろってか。

俺達シグローンとあのエリュシオンの間に結ばれた、クソいまいましい同盟。

思い出したくもない事実を思い出させられて、溜息がでた。

とにかく早く追いつこう。そう言って更に足を早める兄の背中を、今は追いかけることにした。

三話

「忘れないで」

今日子先生の声だ

俺は振り向いて先生の顔を見たいけど振り向けない

俺は、埋まっているから

先生は気にしていないんだろか

先生はうふふと笑った

気にしていないみたいだ

俺は安心した

「忘れないでね、ウル」

そして俺は目を開けた。

灰色の板―天井が見える。

頭がぼんやりする。

先生が何か言ってたような気がするけど、思い出せない。
そうだ

「先生は死んだんだ」

俺は口に出して言った。

そうになると、今のは確かそう、夢だ。

俺は注射の跡を数えながら、いつのまにか眠っていたみたいだ。
どこまで数えたっけ？

足音がして、二人分のそれは俺の部屋の前で止まった。

―血も採ったし、今日はもう用はないはずだけど、なんだろう？

今日子先生がいないから、代わりに話をしてくれるのかもしれない。
でもクレメンザとメガネの人だったら、…いやだな。

そんなことを考えていると、何かをたたきつける様な音がした。
何だ？

その音は十秒くらいし続けて、

ドアが変な音を立てながら少し開いて、止まった。

同時に流れ込んでくる変なにおい。

気持ちわるい。

隙間から手が差し込まれて、ドアを開けようとする。

いやだ。

もう半分開いてしまった。

まぶしくてよく見えないけど、

その奥にある顔を俺は知らない。

鈍い音を立てて、

ドアが開いた。

男が二人入ってくる。

二人とも手に長くて、光るものを持っている。
剣だ。

俺と同じくらいに見える男の方が

―ウル

それを俺に向かって持ち上げて

―忘れないでね

振り下ろそうと

「アシュレー」

俺の声に、剣は俺の鼻先で止まった。

切っ先の向こうで、緑の目が見開かれていた。

四話

「アシュレー」

さっきまで斬り殺してきた奴らと同じ顔―黒髪に青い目―のそいつは、

唇をわななかせて呟いた後、なぜか呆然としたような顔をした。そして口をつぐんだ。

アシュレー、俺の名前だ。

どうしてこいつが知っている？

「…知り合いか？」

「アホか」

兄貴の相変わらずずれたボケを軽く流し、あらためて目の前の奴を見つめた。

その顔に、間近で見た死に顔がだぶって、口の中にいやらしい酸味が広がる。

俺はそれを飲み込んだ。

確かにこいつは今まで斬ってきた奴らと全く同じ顔立ちをしているが、その目には光があった。

―問いただしてみる価値はある…か？

「おい、アシュレー？」

眉を顰めたまま黙り込んだ俺を不審に思ったのか、兄貴が再び話しかけてくる。

任せるとだけ言ってそれを黙らせ、剣を突きつけた相手を真っ直ぐ見据え、

慎重に言葉を選び、言った。

「おいガキ、なんで俺を知ってやがる。答えねえ―と例によってブツ殺す！」

「チンピラかお前は！！」

兄貴はボケはまるで駄目だが、突っ込みだけは立派にこなす。
結局、兄貴に任せることになった。

十分ほどの尋問―兄貴に言わせれば質問―の成果をまとめると、
こいつは小さなパイプベッドしかないこの狭い部屋で、物心ついた
時から飼育されていた。

名前はウルで、その名前をくれた女性は先日死んだ。と、クレメン
ザとかいうオカマからさつき聞いたと。

だいたいこんな内容のことを、悲痛さの欠片もなしにあっけらかん
とそいつは語った。

ただし、最も肝心な、俺の名を知っていたことについては、「わか
らない」の一点張りだ。

「もう一度聞かせてもらうが、なぜ弟の名前を君が知っているんだ
？」

「だからあ、よくわかんないっていつてるだろあ。なんか先生の声
がしてさー。」

「先生？」

「そう。でもそれは夢なんだよ。先生は死んだから……」

「ああもう意味わかんねえことばっか言ってるじゃねえぞ！不思議
ちゃんかてめえは！」

俺は耐え切れなくなつて口を挟んだ。

夢？声？先生？

確かにこいつは喋れるようだし、会話もできる。

しかしさつきから内容が支離滅裂で、意味が通じない。

俺はいい加減に苛ついてきていた。

なんとか情報を引き出そうと、下手に出た態度をとっている兄貴も
気に入らない。

「なあなあ」

「うん？なにか思い出したか？」

と、身を乗り出さんばかりに兄貴が食い付く。

「お前らしくさいぞ」

言いながら思いっきり顔を顰めたクソガキに、俺はキレた。

「ああ臭えだろーよ！てめえのお仲間の血をたっぷり浴びてきたからなあ！」

兄貴の呆れ顔が視界の端に入ってくるが、それは無視することにする。

「は？俺仲間がいるの？」

兄貴がため息をついて首を強く横に振った。これも無視だ。

「おんなじ顔したお仲間だろうが！なんならてめえも一緒のところ」

「アシュレー」

肩をつかんで制止される。

「止めんなクソ兄貴！こいつは細胞からむかつく！！」

「落ち着け馬鹿、プラナから連絡だ。」

俺達の潜入がばれたらしい。」

俺は振り向いて兄貴と、お互いに青ざめた顔を見合わせた。

「なんでだ？」

「わからない…ばれるような行動はとっていないはずだが…。」

なら、エリュシオンの連中がヘマをやったのか。

だからあいつらと組むのはいやだったんだと俺が毒づくと、兄貴もそれを諫めはしなかった。

「とりあえず合流するぞ。彼らを責めるとしても、ここを脱出してからだ。」

それに異論は無かった。

だがその前に

俺達と一緒に黒髪のカキを見つめた。

「こいつは…ここで殺つとくよな？」

もうたいして有力な情報も引き出せそうにない。

第一、此处で研究されている『モノ』は始末しろということだった。

「……いや、連れて行こう。プリウエンに引き渡す。」
「プリウエンに？」

なるほど、そういえばあそこは此処のものを欲しがっていた。
敵を知るためだと言っていたが…。

「いいのかよ？命令違反になるんじゃないかねえのか。」

「うん、報告にはエリュシオンの二人に行ってもらおう。
俺達は先にプリウエンに寄っていく。」

そこまでする価値がこのガキにあるのかと思ったが、
一応ヒョードルは俺の上官でもある。

俺は逆らわずにふうんとだけ言っておいた。

「よし、走るぞ。俺は敵に備えて剣を抜いておくから、
お前はそいつをおぶって走れ。」

俺が異論を唱えまくったのは言うまでもない。

五話

俺だってこの感じ悪いやつにおぶわれたくなんかない。
だから八の字眉毛の一声でそいつが急に静かになって
しぶしぶといった感じで俺の前にかがみこんでくるのにはゲンナリ
した。

そのまま突っ立っていると、肩越しに無言で睨んでくる。

あれだけ言われて、誰が乗るか。

思いつきり顔を背けてやると、今度は八の字眉毛と目が合った。

「俺、プリなんとか行かないからな！」

お前らだけで脱出でも何でも、すれば」

そういつて睨みつけると、相手は自然なしくさで、持っているもの
の柄に手をかけた。

「君がそんなふうになら、ここで死んでもらってもいい
んだけど、どうかな？」

「え」

「俺の目的のためにはなるべく連れて行きたい。
が、どうしてもって程でもない。」

やっぱり殺すかな

据わった目をして囁かれて、思わず後ずさりする。

手袋をした手が、柄を握る。

音を立てて、銀色に光る刀身が姿を見せる。

それには赤いものがついていて、

ああそれは血なんだろうなと俺は思った。

風を切るような音。

飛び込んでくる、流れるような銀色の髪。

鋭い音を立てて、剣が弾かれた。

「どういうことかしら」

静かな、気持ちを抑えたみたいな声に、俺はうつすらと目を開いた。目を開いて一番に飛び込んできたのは、長い銀髪の女の後姿だった。剣とは違う、何か黒い紐みたいなものの持ち手で剣を受け止めている。

一瞬黙ってから八の字眉毛が剣を引くのを見て、女は斜め後ろへ一歩引いた。

「…プラナか。どういうこととは、こちらが逆に聞かせてもらいたいんだが」

「あなたがこの少年をプリウエンへ連れ帰ると言ったから、他の実験体たちは処分してきたのだけ。彼を殺して、責められるのはあなただけではないわ。エステラに依頼を受けているのは、私たちも同じなのだから。」

八の字眉毛の問いかけに、プラナと呼ばれた女はひとつ息をついてからゆっくり、はつきり返答した。

「そうか…そうだったな。申し訳ないと思っている」

うつむき加減になった男を、銀髪の女は無表情に見つめている。

「申し訳ないと思っていようがどうだろうが、関係はないでしょう。あなたが任務を果たす気があるのか、私には疑わしい。」

彼を送り届ける役目は、私とトラシーボで果たします」

その言葉に男は八の字眉毛を吊り上たけど、すぐ表情を戻して、「わかった」とだけ言った。

「おい、その人狼野郎はどこだ」

今まで黙っていた赤毛が、立ち上がってそばへ来ていた。

女に聞いているんだらうけど、目は俺をしっかりとにらみつけている。

「…それはトラシーボのことを言っているの」

「他に誰がいるか？物好きに軍に飼われてる珍獣が？」

そうついて笑うのを聞いて、女が眉をひそめる。

アシユレー！と、八の字眉が叱り付けた。

「何だ本当のことだろ？それよりさっさと脱出するべきなんじゃないのかよ。」

「そのとおり」

いきなり聞こえたほかの声に、全員がそちらを見る。

入り口に誰かが立っている。

「脱出経路を確保してきた。」

トラシーボ。と、銀髪の女がつぶやいた。

六話

小柄で細身の体を壁に凭れかからせ、顎下までのびたぼさぼさの髪から眠そうな目を覗かせて、壊れたドアの横にトラシーボが立っていた。

「…いつ入ってきたんだ？」

兄貴が問いかけると、「今」とだけ返ってくる。

プラナも気づいていなかったと見えて、名前を呼んだ声はかわいていた。

相変わらず無愛想で不気味な野郎だ。

ルー・トライブ出身の奴らは皆、殆ど異常といえるほどの聴覚を持っている。

入室したのが言葉通り「今」だったとしても、

当然その耳で俺の侮蔑の言葉も全て聞いただろうに、トラシーボはつまらなさそうに俺を一瞥しただけで、特に何も言うてはこなかった。

無言のまま、廊下へ出るように手で俺たちを促す。

プラナが真っ先にそれに従い、兄貴がつづいて、

俺もガキを押し出すようにしながら部屋の外へ出た。

「あー、そういうば、ここの研究結果を示すものは？」

若干気まぐしくなった雰囲気を取り繕おうとしてか、

無理に明るい声で兄貴がプラナに問う。

「残念だけど、調べている途中で警報が鳴り出して…。」

書類その他は見つからなかったから、

その少年を殺してしまえば、私たちの努力は水の泡ね。」

「まいったな、さっきのは軽い冗談だろ」

苦笑しながら兄貴が返すが、プラナの言葉に陰があるのも無理はないだろう。

あれは本気で殺そうとしていた。

「ガキのことはともかく、

書類はまた探しゃあいいんじゃないの？

見つかって結構時間経ってるけど、何も起こんねえし。

警報もブラフだろ。」

兄貴をかばうつもりで、自分の発言と矛盾するのを覚悟しながらの意見だったが、

言った後自分で、妙に真実味があるように感じた。

―そうだ、それに見つかったとしても、相手は攻撃してくるところか、

どうせ自己防衛すらできない奴らなんじゃないか？

しかしそれも、トラシーボに素気無く跳ね除けられる。

「さっき言ったように脱出だ。

通路を変なのがつろつきだしている。

これ以上は危険だ。

少し走ったさきに、飛竜を待たせているから、ついて来い。」

それを先に言え。

と、思っても口に出さないあたりが俺も大人だ。

「ふん、このガキは誰が運ぶんだよ？」

睨みおろした顔が、軽くブレた気がして目を見張る。

気のせいだと思った瞬間またブレが生じた。今度はさっきより大きく。

揺れている。

立て続けに起こる振動。

―地震か？

向かいに立っているプラナとヒョードルの引き攣った顔を見て、それとも思い直す。

地震なんかじゃない。

廊下全体を揺るがせながら、背後からなにかが来ている。

「来たぞ走れ！」

俺は振り返る暇もなく、ガキを脇に抱えて走り出した。

「トラシーボ、『変なの』って表現はちょっと控え目すぎないか…」

俺の横を走りながら、兄貴が呆れたような声で呟く。

先頭に行くトラシーボは例によって無言だ。

兄貴の声に混じった、隠し切れない震えに興味を持って、ふと振り返る。

ちょうど角を曲がる寸前だったが、後ろに迫ってくるそいつを確かに目に捉えた。

そいつは、今まで殺してきたやつらと、今連れて帰ろうとしているこいつと同じ、黒い髪に青い目をしていた。

ただし、比べ物にならないほどもっとずっと醜悪でおぞましい。

頭部の中心には口と思しき穴がぽっかり開き、泡と腐臭が同時にふき出す。

皮膚は赤黒く変色して泡立つように盛り上がり、肉の間から片側の眼球だけがのぞいている。

怪物検定があればこれだけでも合格だろうが、とどめはその巨大さだった。

けして狭いとは言えない廊下を、巨体で殆どふさいでいる。

膨らんだ手足で一步這うたびに肉が擦れ、弾け、黄色い体液が飛び散って白壁を汚していた。

「なに、なんかいんの!？」

腕に抱えたガキが、急に必死になった俺の顔を見上げ、小うるさい声で喚く。

「こいつを放りだしやあ、もっと早く走れるな。」

「あの角の先だ!」

不穏な考えを呼んだかのように、トラシーボが短く叫ぶ。

進むたびに慣れ親しんだ外気に近づき、気分が高揚するのを感じ、急ぎ立てられるように速度を増す。

十歩と行かないうちに、出口にたどり着いた。

夜の口のように開け放たれたその先の暗闇は激しく吹雪いている。

トラシーボが指笛を吹き、プラナが鞭を振るう。

上空を旋回していた飛竜たちが高く鳴きながら下降を始めるのを確認して、

背後に化け物の長い咆哮を聞きながら、

俺達は身を切るような冷気の中に飛び込んだ。

七話

国家に所属する魔女達が住まう巨大な塔プリウエン。

その階層全てを震わす爆音が響いたのは、昼頃のことだった。

薬品棚の整理中だったハーキイは、振動で華奢な体をよろめかせる。水銀の入った瓶が落下するのをエステラの静かな横顔を見て思

「な、何なのよ!？」

向ける相手もわからないまま、ハーキイは抗議の声をあげる。

そのまま混乱状態に陥りかけるが、エステラの静かな横顔を見て思いとどまる。

―だめだみつともないまねはしたくない、特にエステラの前では。

プリウエンには変わり者が多いが、その中であってさえ浮いているエステラの周りには、常に黒い噂が纏わりついていた。

曰く、精霊を冒瀆する怪しい実験を繰り返している。

曰く、侵略者共のミネルヴァと繋がりがあある。

“ニンゲン”を作る研究をしているという噂さえまことしやかに囁かれていた。

いつも独りで研究室に籠っている姿から連想されたものかもしれないし、

明らかに非凡な才能がそれを招きよせたのかもしれない。

いずれにせよ確かといえる話は一つとして存在しなかったが、逆にそれらを打ち払うことのできるものも無かった。

当のエステラが、肯定も否定もしなかったからだ。

彼女は何を言われようが、ただ平生どおり緩やかな笑みを口元に浮かべるだけだった。

ハーキイはそんなエステラの態度をもどかしく思いながら、一方で強い憧憬を覚えた。

―自分なら、自分ならそんなに平気で居られない。

それどころか人から非難されるような行動をとることさえできない

だろうことを、

ハーキイは知っていた。

―変わり者、浮いている…それなら自分だってそうだ。
痩せすぎた幼い身体と裏腹に、ハーキイは早熟な思考を持つ少女だった。

周囲とうまく馴染むように気をつけて振舞いながら、やるせなさ
と疲れを感じていた。

周りがなんと言おうと、自由に、思うままに動くエステラ。
そんな彼女に惹かれるのは、ハーキイにとって必然だったかもしれ
ない。

彼女はいつしかエステラと共に行動するようになった。
付き合いだして間もない頃から、ハーキイはエステラを尊敬する
ようになっていた。

それを表に出すことは、彼女の高いプライドが許さなかったが。
とにかく、ハーキイはエステラにだけは軽蔑されなくなかった。

そのエステラが立ち上がった。

体の丈ほどもある杖を握り、扉へ向かう。

「ちよつと、見に行くわけ？」

同じく立ち上がったハーキイが尋ねると、エステラはちよつと振り
返った。

「彼が到着したみたい…」

「彼？」

エステラは答えずにそのまま部屋を出て行く。

暫しの逡巡の後、ハーキイもあわててその後を追った。

人々のざわめきを辿っていくと、足は自然と上層へと向かった。
空中庭園への階段を上りきった瞬間、前に行くエステラの足が止ま
り、

ハーキイは思わず鼻をぶつける。

目の前の背中を睨みながら奥を覗き込み、ハーキイはただ目を見開いた。

常時幻想的な碧色につつまれているはずの庭園には高く瓦礫がつもり、そこに外界の白い光が細く差し込んでいる。

光の元を辿った先の天井には巨大な根に似た物がつきささっていた。時折苦しげにうごめいている。

呆氣にとられて皆が遠巻きに見つめる中、エステラは瓦礫のもとへ迷いの無い足取りで辿りつく。

ショックに思考が停止していたハーキイは止めることも引き戻しに行くこともできず、

口をあけてそれを見ていた。

エステラは一度杖で強く地面を突き、低い声で何かを囁く。長い栗色の髪がうねるように浮きあがる。

根のつきささった辺りの空間が微かに歪むのを見て、ハーキイは我に返った。

―何だこれは何が起こっている何を…エステラは何をしている？
駆け寄ろうとしたハーキイの目に、異様な光景が映る。

いまだ動き続けている根の周りの天井が、粒子となって空気に溶けて消えていく。

その向こうに姿を現したのは根などではなかった。

「……竜」

ハーキイは足をとめて呟く。

右脚を開放され、悠然とした体で飛竜が降り立つ。

硬い鱗に覆われた体躯、しなやかに伸びた首、空中を行く翼の代わりに殆ど退化した足。

首の根元に着けられた銀のベルトが、それが軍用であることを示していた。

「いらつしゃい、アシュレー」

エステラの声に竜の背が震え、布が滑り落ちる。

中から姿を現した長髪の少年はどこか決まり悪そうな顔のまま、積

もった瓦礫の上に飛び降りた。

着用したシグローンの象牙色の制服は、血と煤に汚れている。

「あー、下の奴らが入れてくれねえから…上からな！いや別に壊すつもりは…」

「彼は」

エステラの有無を言わせない勢いに押され、しぶしぶといったようすでアシュレーは脇に抱えていた大きな袋を下に降ろし、蹴り上げた。

力なく開かれた白い指が中からのぞく。

誰ともなく息をのむ。

「あら…殺しちゃったの」

「違わあ。寝てんだよ」

つま先で転がすと、気持ちよさそうに寝息をたてる少年が姿を現した。

「ふふ、ずぶといのは今日子譲りかしらね…。とにかく、でかしたわ」

微笑みながらエステラが労うと、なぜかアシュレーは居心地悪そうに首を捻る。

「ああ…プラナたちもご苦労様。はいってきていいわよ」

その言葉の終わらないうちに、渦巻く風を伴って次々と竜が舞い降りた。

乗り手の一人の銀髪の少女が二人の直ぐそばに着地し、整った貌をゆがめながらアシュレーになにやら厳しく詰め寄っている。

剣呑な雰囲気をしり目にハーキイがエステラの元へ駆け寄ると、彼女はひざまずいて、眠ったままの少年の顔を見つめていた。閉じた目にかかった前髪をそつとはらう。

「この世界は羊水。きたるべき神のための―」

「エステラ？」

三日月のように微笑みながら、エステラは少年の頬を撫でた。

「今日子的心思は、わたしが継ぐ」

八話

なつかしいにおいがする

くすりのにおいだ

きょうは血をぬく日じゃなくて

くすりをうつ日らしい

いやだな

くすりをうつたあとは足がしびれるからいやだ

その日一日は今日子先生もあいにくしてくれないし

クレメンザの男なのにべったり赤くぬったくちびるがうごく

― 処分されたわ

ああ

ここまできて俺はやっと、これがいつもの夢だと気がついた

この後起こったことの方が、俺にとってはよっぽど印象深いだろうに、

繰り返し見るのはなぜかこの場面だ

― わかる？

死んだってことよ死んだってことよ死んだってことよ

「ウル」

冷たい掌が頬に張り付く感触に、俺は一気に覚醒した。

まだ重たい瞼を開くと、エステラがベットに腰かけて長い睫毛の向こうから俺を見ていた。

窓を閉め切った部屋の中は暗く、わずかに開いたドアから漏れる光がぼやけた輪郭を縁どる。

もう朝だろうか？

問いかけようとして口を開くが、乾いた咽は耳障りな音を立ててそれを阻んだ。

エステラはふと立ち上がって、ひらりと手を振る。

意図が読めずにそのまましていると、焦れたように手を引かれ、部屋から連れ出された。

そのまま長い廊下に出て歩き出す。

左右にそり立つ壁は波打ち、のたうつ蚯蚓のような文字を時折浮きあがらせる。

最初の頃こそ夢中になって眺めたが、今では珍しくも感じず素通りする。

視界の端で水を表す旧文字がとぐろを巻くようにして萎んだ。

誰ともすれ違わないまま空中庭園へ続く階段の踊り場まで着いて、ずっと握っていた手がようやく離された。

エステラは身振りで“ここで待て”と伝えて、ひとりで上層へ上がっていく。

とり残されて、俺は仕方なくその場にしゃがみこんだ。

隅の方にたまった砂を指で撫でる。

ここにきてから4年経った。

正確に言えば連れてこられてから、だが。

研究所からさらうように連れ出された後のことは、気絶していたため覚えていない。

エステラやハーキイは俺が寝ていたと言うけど、多分何かの勘違いだろう。

俺がそこまで図太い神経をしているわけがない。
意識を取り戻すともうそこはベッドの中だった。

―ここで、今日から暮らすのよ

エステラがそう言ったのをはつきり覚えている。

そしてその言葉通り、あの日から俺はこのプリウエンの中で生きている。

廊下や庭園をうろつくのは自由だが、塔の外へ出ることは禁止されていた。

魔女の住まうプリウエンに男は俺ぐらいのものらしく、気軽に話せる相手はハーキイか、年上の魔女数人しかない。

その彼女達もほとんどの時間を研究室で過ごしているため、基本的に俺はエステラに与えられた書物をひたすら読み続けて毎日過ごしている。

自由に歩け、知識を得られることは喜びだったが、研究所にいたころとたいして状況が変わったわけではないことを俺はだんだん理解してきていた。

結局、飼われている。

男で、魔術の才があるわけでもない俺をここに住まわせることに数え切れないほどの圧力や反対があったことをハーキイから聞いて知っていたし、何より周りからのささやかな拒絶の空気を俺自身が肌で感じていた。

エステラがそれらを抑え込んでいる。

エステラの指一振りで、俺はどうにでもなるのだろう。

彼女が何のために俺を4年保有しているのかも、俺は知らない。

鬱々とした気分で、俺は膝を抱え込んだ。

そつえば何でここに連れてこられたんだろう。

新しい薬草の栽培にでも成功したんだろうか。

そう思っ顔を上げると、ちょうどエステラが階段を降りてくるところだった。

後ろに誰か連れている。

「彼か？」

久しぶりに聞く低い声で、その人間が男なんだとわかった。エステラが笑みを浮かべ一歩引き、代わりにその男の人が俺の前に立つ。

少し目を見開いて俺を見つめてくる顔は、今まで見た中で一番綺麗なつくりをしている。

茶色がかった金髪が乱れ、ところどころ跳ねている以外はほぼ完璧といってもよかった。

ただ、何の感情も映していない目がなんとなく――

「からっぽ」

その言葉が俺の口から漏れ出たことに気づいて、俺は慌てて口を塞いだ。

男の人が二、三度、ゆっくり瞬きをする。

「ね、面白いでしょう？その子」

エステラがくすくすと笑いながら言うと、男の人は無表情のまま頷いた。

「なるほど」

「で、如何なさるのかしら。ケイヴァン様は？」

「引き受けよう」

それだけ言うと彼は身を翻し、まだ肩を震わせて笑っているエステラを置いて階段を上っていく。

ひとしきり笑うと、エステラも上へ上がっていく。

俺も立ち上がって後を追った。

空中庭園の全貌を見渡せる位置まで来て、俺は目をむいた。

竜だ。

本でしか見たことはないが、確かに本物の竜が横たわり翼を休めていた。

ケイヴァンと呼ばれた男の人が首を撫でると、扉が軋むような音をたてて喉を鳴らした。

エステラに押されるようにして、俺もすぐ傍まで近づいた。

見上げると、その向こうの天井が揺れるように歪んでいるのが見えた。

「はあ…何これえ」

目も口も限界まで開いている俺の顔を見て、男の人が眉をひそめる。

「彼は本当に使えるのか」

「低脳そうに見えるかもしれないけど、大丈夫よ。知識はあるからなにかとても失礼なことを言われている気がするが、混乱している俺に文句を言える余裕はない。

「ウル、寝る前には歯を磨くのよ。肉類もちゃんと食べること、いわね？」

エステラに肩をたたかれて振り向くと、そろえた指先ですつと目の上をなぞられる。

途端に頭がひっくり返るような強烈な眩暈を感じて、しゃがみこもうとしてそのまま倒れた。

瞼が開けていられないほど重い。

意識がどんどん沈んでいくなかで、波の音のような声が途切れ途切れに聞こえる。

「君……説明……いい……」

「…きいたら…か…ら…」

「じゃあ元気でね、ウル」

耳元で囁かれて、そこで意識が途切れた。

九話

みしり

一步踏み出すごとに、足下に薄く張った氷が、そんな音をたてて割れる。

カンテラの心細い光が、細かい破片を照らした。

灯りを掲げて広間―広間であつたであろう場所―の奥に目を凝らすと、暗闇の中に何本もの円柱が、規則的な間隔で並んでいる。

ああ

この部屋も同じだ。

俺は知っている。並んだ柱に、同じく薄い氷がはりついていることも、その中にあるものも俺は―俺は、長く息をついた。

11年だ。

この国にミネルヴァと自ら名乗る侵略者どもが本格的に攻めこんできて、11年経った。

もつともその以前から小さな小競合いはあつたのだから、それを除けばの話だが。

当時、両親を事故で失い、もともと名前だけの貴族だった俺達兄弟が更に落ちぶれ、家も無くしてスラムをうろついていた頃から数えれば9年と少し。

その後シグルーンの一隊長に拾われて、軍に入ってから7年。

たいした後ろ盾もなしに、小隊を任せられるようになった兄貴の出世は、異例といえば異例なんだろう。

任される仕事が、とうの昔にミネルヴァが撤退した後の、荒廃した研究所の後始末というのは納得がいかないが。

特にここ数カ月はそれ専門といった体で、一線で戦うこともできず、

奴らが残したものを只管に壊す、壊す、壊す。たまに珍しい物があれば持ち帰る。

俺はうんざりしていた。

壊す対象がこの“培養器”とかいうやつときは尚更だ。

こいつの中身は――

とにかく、

とにかく、この部屋を片付けなければ、やらなければ、仕事は終わらない。

帰ったら兄貴の秘蔵の酒をしこたま飲んでやろう。十日ほど前に偶然見つけた隠し場所は、まだ変わっていないはずだ。

そう思いながら、手前にそびえる柱に近づいた。

厚い皮の手袋で薄氷を擦り取ると、白く濁ったガラスが顔をのぞかせる。

その中を、どういうわけか凍らないまま、液体が満たしていた。

緑色のそれは、なにか特殊な液体なのかもしれない。そう、奴らお得意の。

明かりを近付けると、黒っぽい物体がぐねぐねと漂っていた。

俺はそつと安堵のため息をついた。

よかった。

これは人体の形を留めていないから。

さっきのは酷かった。

思い出したくもない。

まだ新しい記憶の断片を振り払うかのように、俺は足早に次の培養器へと向かった。

何本という培養器を打ち壊す内に、どうやら次でこの部屋の培養器は最後のようだった。

持ち帰るのにめばしい収穫はとくになかったが、俺からすれば寧ろそれは喜ばしい。

何か持って帰ったところで荷物が増えるし、あの魔女、エステラを喜ばすだけだ。

プリウエンの研究に使っているとか、建前ではそう言っているが、実際のところどうだか…。

なんだかあの女の私腹を肥やすのに貢献している気がしてぞっとしない。

—そういや、何年か前に土産にしたガキはどうなったんだっけな
ぼんやりと考える内に、柱の前に辿り着いた。

殆ど情性のように、手袋で柱にこびりついた薄氷を擦り取る。

中をのぞくと、そこにはぶわぶわした黒い塊がある。

そう、予測していた俺は、視界に飛び込んできたものに驚愕した。

少女だ。

長い髪、白い裸体がゆらゆらと揺れている。

細身だが、ゆっくりとした起伏を描くからだに思わず息をのむ。

馬鹿な。

これは死体だ。

だが、死体と割り切ってしまうには、それはあまりにも—美しかった。

艶のある紫紺の髪、瑞々しい肌。優しげな顔立ちは微笑んでいるようにも見える。

だから少女の目蓋がうつすらと開いた時、俺は自分が妄想の中にいることを自覚した。

彼女の瞳が俺を捉え、たおやかに微笑む。

白い、細い指先がガラスに触れる。

瞬間、かなり分厚いはずのガラスに亀裂が走る。

妄想だ、すべて俺の。

しかし、亀裂が大きくなり、ひびになる。

その音で俺は我にかえった。

いや違う、これは

これが現実だ。

ガラスが破裂するように割れ、鋭い破片が降りかかってくる刹那、なんとか纏ったマントを盾に防ぐ。

いくつか大きな破片が刺さった手ごたえ。思わずぞつとする。

一瞬でも反応が遅れていたら……。

恐慌が去った気配に厚い革製のマントをおろすと、あたりには大小の破片が無数に散らばっていた。中に満たされていたはずの液体は、やはり蒸発してしまっただろうか、姿を消している。

消えたのは液体だけではなかった。

少女は

あの少女はどこにいった？

ひとり

背後でそんな音がして、振り向く。

白い足。

裸足だ。

視線を上げる間も無く、身体が倒れこむように覆いかぶさってきた。剥きだしの肩を掴んでとどめる。

ちょうど目の前にきた唇が、小さく動いてかたちをつくる。

あ

り

が

と
う

—ありがとう？

そのままこうべを垂れて力を失った少女の身体を慌てて抱きとめる。
触れ合った胸から、微かな鼓動が伝わってきた。

生きている。

この少女は

人間だ。

じゃあ俺が今さっきまでしてきたことはなんだ？

たたき割ったガラスは

破片の中に散らばった肉塊は？

—仕事だ

そんな声が胸の奥から聞こえた気がした。だが震えは止まらなかった。

隣で同じく仕事を終えた兄貴が、俺の帰りの遅いのを不審に思っ
て駆けつけるまで、俺はずっと震えていた。

十話

汲み置いていた地下水で顔を濯ぎ、プラナは秀麗な眉をひそめて溜め息をついた。

今朝もあの少年が起きてくる気配はない。

「三年前」のあの時もそうだった。

突然房から連れ出され、飛竜に乗って三日三晩空を飛んだというのに、彼は赤子が母の腕に抱かれているように安眠していた。

トラシーボは度胸があるとか言って感心していたが、寝汚いのだ、要するに。

白い頬を、「麻布」で強く拭って、「彼」の部屋へと向かう。

あの少年がここに来て、いつからか彼を起こす役目は自分のものになっていった。

いくら自分が少年の世話役であるといっても、十七になった女が、弟でもない、いくつも変わらない―きつと変わらないであろう―男を起こしに行くという状況にプラナは首をかしげたくなる。

とはいえ、ケイヴァンの補佐という仕事の一部には変わりないのだし、ウルのことともそう嫌いではない。役割自体に、プラナは特別不満を持つてはいなかった。

しかし、あの部屋の扉を開く瞬間の感覚は、いつまでたっても慣れなかった。

扉を開けて一歩中へ踏み出す瞬間、

誰かいる気がするのだ

少年と自分の他に

おざなりなノックの後に扉を開き、臭いの無い濃厚な気配につつまれながら、プラナは薄灰色のシーツを思いきり引き上げた。細い体が床の上に転がる。

黒い軍靴の底で、プラナは床を2回、強く打ち鳴らした。こうでもしないと起きないのだ、本当に――。

目を擦りながら何か意味のない言葉を繰り返す少年――ウルを急ぎたてて、自分は部屋の外で準備ができるのを待った。

少し経って出てきた少年を連れて、長い廊下を歩く。

まだ後ろでぶつぶつと言っているのを無視して歩き続けていると、前方に暗い赤色が揺れた。

――厄介な

赤い髪を腰まで伸ばした長身の姿はアシュレーだ。街へ出るころなのか、シグルーンの黒い軍服は着用していない。

プラナたちエリュシオンと彼の所属するシグルーンが同盟を結んで久しいが、何が気に食わないのかこの青年は、顔を合わせるたびに厭味を飛ばしていく。

それに対してウルが喰ってかかるのも毎度のことで、プラナは心底参っていた。

――ミネルバとの戦いで十分エネルギーを失っているのに、なぜ自分の時間がくだらない喧嘩の仲裁に使われなければならないのか？

まだ相手がこちらに気づいていないのを見て取ってプラナは来た道を引き返そうとしたが、アシュレーに気づいたウルが声を上げるのが早かった。

「おまえーっ！この前言ったこと訂正しろよなーっ！！」

拳を振り上げ、そのまま殴りかかっていく。

気づいたアシュレーはそれをいなすと、長髪をひるがえして鋭い蹴りをくりだす。

戦いは終わらないのか？

努力むなしく、いつまでも繰り返されるのか？

ーいや、止めてみせる。けれど……

プラナは溜め息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3913c/>

銀の煌蝶

2010年10月21日23時37分発行